

I. 東京をどう見るか？巨大都市東京解説の 視点—混みあいについて

東京をどう見るかというのは、現代の文明を解説することである。

今、現代文明の反省として、様々に東京が論じられている。一市民の発言もあれば、都市問題に対する専門家の発言もある。

東京の過去、現在と同時に、東京の未来論もある。東京の未来をどう画くか。SF的な表現もある。構想、計画もある。東京論となればずいぶん様々なレベルのいろんな切り口でみてゆくことが必要だと思われる。個人的なものもあればグループで研究し、政策提言を行っている場合もある。変わったのでは、首都懇というものがあり、これは遷都をすすめるということで、国会議員とか学者の集まりで、東京は様々な場面で危ないので、地震もやがてくるので遷都したほうがよいという話をやっている。また東京をSF的に解いたのが小松左京氏の「首都消失」という小説で、ある天変により首都東京がスッポリと消失し、それで日本中大混乱を起こす、社会経済機能がマヒするという話である。もし首都がなくなったら、首都もろとも東京人が忽然といなくなったら、どういう状況が起こるかということが、地球レベルの問題として書かれていて面白い。

その他、東京の未来の計画論についても、様々なレベルで盛んである。まず、国が策定する計画は、最近の首都改造計画。これは法的な拘束力はないけれど、国土庁・大都市圏局が中心になって作ったものである。この大都市圏局がまとめた首都改造計画が下敷になって、第4次首都圏基本計画が出来上がっている。これは第3次首都圏基本計画と接続し国の法律に位置づけられている。

また、これに合わせて、首都圏内各都県の総合計画が進行中であり、東京都ではマイタウン構想がある。東京都の計画は知事が決めるから、選挙で首長が変わるたびに変更される運命にある。前の知事の場合は「青空と広場の東京計画」であり、ややソフトな計画であった。今度の計画はハードに力点を置いた計画と見受けられる。新宿の都庁移転、あるいは、東京湾をどうするか、日本の都市の中で最も活発に動いている23区の再開発をどうするか、大建築を幾つ建てるか。鈴木知事の場合は首都改造型である。

東京都主導型のプロジェクトは多数あるが、私も参加しているプロジェクトに「江戸・東京博物館」というのがある。今度両国に作ることに決定したが、どこの場所がいいか議論していた時期のある日、都庁が新宿にくることが決定し、それに伴って下町地域が陥没するということで、両国の国技館のそばに空地があるから、そこを設定するみたいなことで場所が決定した。東京の実際はかなり政治的判断で決まってゆくようである。東京都は都庁が移ることにあわせて、第2次長期計画を策定している。また、第4次首都圏基本計画とのすり合わせということで、圏内各県も一斉に見直しを始めている。